（ながつき）九月ばかりになりて、出でにたるほどに、箱の
副助 格助 接助 完了「ぬ」用 格助 格助

ある（ラ変・体）を手まさぐりに（格助）開け（下二・用）て見れ（上一・已）ば、人（格助）のもとに（格助）
完了「たり」体 接助 接助 接助 格助 格助

やら（四段・未）む（意思「む」終）と（格助）しける（サ変・用）文あり（ラ変・終）。あさましさに（格助）、見（上一・用）て
格助 過去「けり」体 完了「つ」用

けりとだに（格助 副助）知られ（受身「る」未）むと（格助）思ひて（四段・用）、書きつく（下二・終）。
過去「けり」終 四段・未 意思「む」終 格助

うたがはし（形ク・已）　ほかに（四段・已）渡せる（完了「り」体）　ふみ見れ（上一・已）ば（接助）
形シク・終

ここや（係助）とだえに（格助）ならむ（推量「む」終）とすらむ（サ変・終）
四段・未 格助 現在推量「らむ」体

など（副助）思ふほどに（格助）、むべなう（形ク・用（ウ音便））、十月（かみなづき）つごもり方に（格助）、
四段・体

三夜（みよ）しきりて（四段・用）見えぬ（下二・未）時あり（ラ変・終）。つれなうて（接助 打消「ず」体）、「しばし（副詞）
形ク・用（ウ音便）

試みる（上一・体）ほどに（格助）。」など（副助）、けしきあり（ラ変・終）。
格助

これより（格助）、夕さりつ方、「内裏（うち）にのがる（下二・終）まじかり（不可能「まじ」用）
格助 格助

けり（詠嘆「けり」終）。」と（格助）て（接助）出づる（下二・体）に（接助）、心得（下二・未）で（接助）、人（係助）をつけ（下二・用）て（接助）
使役「す」已

見（上一・体）すれ（接助）ば、「町小路（まちのこうぢ）なるそこそこに（格助）なむ（係助）、とまり（四段・用）
存在「なり」体

給ひ（四段・用）ぬる（完了「ぬ」体）。」と（格助）て（接助）来（カ変・用）たり（完了「たり」終）。
⑤使い→筆者

されば（終助）よと（格助）、いみじう心憂しと（形ク・終 格助）思へ（四段・已）ども（接助）、言は（四段・未）
接続詞 形シク・用（ウ音便）

むやうも（係助）知らで（四段・未）あるほど（ラ変・未）に（格助）、二日三日（ふつかみか）ばかりあり（ラ変・用）
婉曲「む」体 接助 格助 副詞

て（接助）、暁方（あかつきがた）に（格助）門（格助）をたたく（四段・体）時あり（ラ変・終）。
断定「なり」体（撥音便）

さなめり（副助 推定「めり」終）と（格助）思ふに（接助）、憂く（形ク・用）て（接助）、開け（下二・未）させ
打消「ず」已 使役「さす」未

ねば（接助）、例の（格助）家と（格助）おぼしきところにものし（サ変・用）たり（完了「たり」終）。
形シク・体

九月ごろになって、（作者の夫である兼家が）外出した時に、文箱があるのを手慰みに（何気なく）開けて見てみると、他の女のもとに届けようとした手紙がある。驚きあきれて、せめて（私が）見たとだけでも知られようと思って、書きつけた。

他の女性に送る手紙を見ると、もう（あなたが）こちら（私のもと）に来られるのは途絶えてしまうのではないかと疑わしく思っています

などと思っているうちに、案の定、十月の末ごろに、三夜連続で姿を見せない時があった。（夫兼家は）素知らぬ顔で「しばらく（あなたの気持ちを）試している間に（三日も経っていました）」などと（思わせぶりな）言い訳をする。こちら（私の家）から、夕方、「内裏に断ることのできない用事があるのだよ。」と言って出かけるので、納得できず、召使いをつけて見させると、「町小路にあるこれこれにお停まりになりなさいました。」と言って帰って来た。

思った通りだと、たいへん情けなく思うけれども、何と言って良いのかわからずいるうちに、二、三日ほどして、明け方に門を叩く（音のする）時があった。

そのようだ（兼家が来たようだ）と思うと、不愉快で、（家の者に）開けさせなかったところ、例の（町小路の女の）家と思われるところに行ってしまった。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/